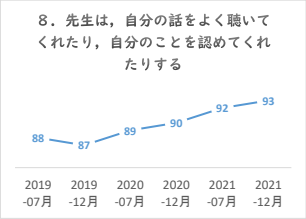
令和3年度　学校関係者評価書（様式）

評価項目	本年度の重点取組	具体的な取組と指標　＊ 活動指標	成果と課題	学校関係者評価	今後に向けて
1 学力保障	・粘り強く考え、ともに学び高め合う子の育成のための授業づくり	●子どもたちが興味関心をもって意欲的に取り組めるように、課題を工夫する ・子どもたちが考えたくなるような課題づくり ・多様な考え方を引き出し、子どもがその意見を比べることができるような課題づくり ＊（児童アンケート） 「国語・算数の勉強は楽しい」・・・80％以上 ＊各グループで、年に1回全担任が公開授業をおこなう。	○課題を工夫することが、子どもたちの興味関心を引き出し、意欲を高めることにつながることを改めて全職員で確認できた。今後も引き続き、課題の工夫を意識した日々の授業づくりを全職員で統一して行っていくようにする。 ○全担任が公開授業を行ったことにより、他学年の教師間で授業の工夫について交流する機会も増えた。 △児童アンケート「国語の勉強は楽しい」では、2学期では82％の児童が肯定的な回答をしている。「算数の勉強は楽しい」では、2学期83％の児童が肯定的な回答をしている。その一方で2教科とも「楽しくない」と否定的な回答をした児童も少なくない状況である。これらの児童は日々の授業でつまずきを感じていると考えられる。まずは担任が児童に寄り添い、丁寧な指導や意欲的に参加できるような手立てを各学年で話し合う必要がある。	・ともに学び合うという考え方には共感します。難しい課題だとは思いますが、工夫しながら取り組んでいただいており、ありがとうございます。	・ともに学び合うとは子どものどのような姿なのか、そのために何が必要なのかを教職員で共通理解する必要がある。 ・今年度は、子どもの意欲に焦点をあてた研究であった。学習指導要領では、主体的・協働的・深い学びが求められている。今後はこの3つの柱を関連させた研究が必要となる。 ・児童アンケートの結果より、国語や算数の勉強が「楽しくない」と感じている児童もいるため、興味・関心を持って勉強に取り組める一助として、ICTを活用した授業づくりを全教員で研修していく。
	・少人数指導による一人ひとりの子どもの学びの充実 ※今年度の少人数指導とは，1クラスを複数の教師で指導するTT（ティームティーチング）である。	・1年生から4年生週1時間の少人数指導の実施 ・5年生と6年生週2時間の少人数指導の実施 1年生から4年生　算数　28時間（週1H） 5年生と6年生算数　56時間（週2H） 現在の実施状況から32 週となる見込みである。	○少人数指導の結果、児童アンケート「算数の勉強は楽しい」で7月・・・81％　12月・・・83％の子どもが「楽しい」「まあまあ楽しい」と回答。 ○楽しいからできる、できるから楽しいと思う子どもを増やすことができた。 ○1つの学級を複数の教員で指導できるため、子ども一人ひとりの学習の進捗状況を把握できるとともに、きめ細やかな指導ができる。 △週1時間、もしくは2時間であるため、効果の高い学習内容の授業のときに少人数指導ができるとは限らない。 △担任と入っていただく教員との打ち合わせができないときがある。 △まだまだ基礎基本が身についていない子どもも多い。 △高学年では、これまでの学年の学習につまずきがある子どもも多く、週2時間の少人数指導でまかなうことはできない。低学年の学習に重きを置くことも必要になる。	・大規模校において、少人数指導に取り組むことは高く評価します。ただし、限られた時間の中では限界もあることから、多様な団体との協働もご検討願います。（例えば、大学生とか老人クラブとか） ・「楽しい」「まあまあ楽しい」以外の回答をした児童について、「楽しい」と回答できるような取組をお願いします。 ・全ての子どもに学ぶことの楽しさを知る機会を与えるためには、さらに多くの人材と時間の投入が必要だと思います。少人数指導の効果が感じられるので、今後も継続してほしいです。 ・算数が楽しいと多くの児童が回答していることは素晴らしいと思います。 ・先生方の努力を、保護者の方の理解度はどうか。 ・高学年になる程、習熟度に差が出てくることを考えると、時間数を増やしてもらえるのはありがたい。八割以上の児童が勉強が楽しいと感じているのは、少人数指導の成果だと思う。	・開かれた学校づくりをめざし、より多くの人の目で児童をみていける体制を築いていく。 ・「あまり楽しくない」「楽しくない」と回答している児童に話を聞いたり、その児童の困り感を考えたりして、授業の工夫やよりよい支援の体制を構築していく。 ・人材と時間には限りがあるので、すべての子どもが学ぶことの楽しさを実感できるように授業の在り方を見直したり、より良い少人数指導の在り方を模索したりして、研究を進めていく。
2 特別支援教育	・配慮・支援が必要な児童への取組の充実	●支援ファイル，個別の支援計画等を活用した校内関係者会議の充実 ＊支援会議…　約30回（引継ぎのための支援会議を含めると60回以上）	○支援の必要な児童についての情報共有をしてきたことで、学年・学校全体で児童を支援するという意識がすすんでいる。 ○支援員やスクールライフサポーター、スクールカウンセラーとも常に情報共有し、支援方法についての検討を重ねてきたことで、支援をタイムリーに届ける機会が増えた。 ○以前から課題となっている支援会議の時間設定については、校内関係者会議を休憩時間や放課後の短い時間に行うことである程度対応し、負担を減らすようにしている。 △課題としての、人的配置と適応指導教室の設置は必須項目であるが、地道に行政に働きかけていくことが大切と考えている。	・本校の支援教育は、三重県の中でも先進的な取り組みだと思います。取り組みが進んだ学校へは多くの児童が就学を希望します。鈴鹿市のモデル校として、、人材・予算付けを図っていくべきだと強く感じています。 ・支援会議の充実により、対象児童にとっては学校生活が良い方向へと変わっていると思われます。桜島小学校には多くの要支援児童がいて、指導者の負担も大きいと思われます。指導者が疲れ果てないような工夫がいるのではないかと思う。 ・受け入れ人数を制限して、各学校で分担したほうが良いと思う。当校の負担が多いのでは・・・と思う。 ・支援の必要な児童に対し、支援員だけでなく、いろいろな立場の教員が情報共有することで、より良い支援につながっていると感じる。	・より良い支援を届けるため、また、きちんと届いているかどうかを確認するため、情報共有、相談、支援会議（臨時・定期）をタイムリーに実施する。そのために、Coの副担当（複数）を設定し、週一回定期的に部会（管理職・Co・副Co）をおこない確認していく。 ・外国籍児童と保護者に向けたキャリア教育を実施する。
	・多文化共生教育の取組の充実	●外国につながる児童理解のための取組 ＊学習活動・バンドスケール等	○全ての学年において多文化共生教育を行った。今年度は人権教育の中で多くのクラスが外国籍児童を核にし、周りの児童のかかわりを問い直す取り組みを行った。子どもたちは、身近な先生や仲間の話などから、言葉が分からないことからくる不安や困り感に思いをめぐらせ、その子への関わり方を考えることを通して、共生について理解を深めることができた。 ○今年度は、三重県が策定したダイバーシティ推進方針の資料を用いて、職員研修を行った。多文化共生の定義や県の方針を職員間で確認した。 ○学習活動においては、国際教室の担当が在籍学級へ支援に入ったり、国際教室で取り出し授業を行ったりしている。算数などの学習では、日常会話ができていても学習言語が難しい児童を中心に、母語や日本語で補足することで理解が進み、少しずつ学習に自信がついてきている。 ○今年度は全職員でバンドスケールおよび日本語指導についての研修会を行うことで、同じ知識や意識をもって支援にあたる体制を整えることができた。バンドスケール会議において児童一人一人の課題を把握し、具体的な支援につながっている。今年度の支援が来年度にスムーズに引き継がれ、日本語支援の必要な子ども全てが安心して学習できる環境づくりに引き続き取り組みたい。	・すべての学年において多文化共生教育を行ったことを評価します。日本語支援についても多大なご努力を感じます。 ・外国籍児童が多い桜島小学校での学校生活は、外国の文化等にふれあうことができる貴重な場であるので大事にして欲しいです。 ・外国の子ども達への学校側の配慮が校内の掲示物、配布物、先生方の呼びかけなどから感じ取れます。日本語支援については、保護者の協力が得られるような取組があれば、ボランティア等で協力することも可能かと思う。 ・桜島小は、外国につながる児童が多く、日ごろから多文化共生を学べる環境にある。その中で互いの文化を認めることのできるクラスづくり、学校づくりをしていただきたい。	・学年に合わせた多文化共生教育を、引き続き検討し、今後も続けていきたい。自分たちに身近な諸外国はもちろんのこと、他者との違いについても教科学習等と絡めながら、学習を進めていく。 ・日本語支援については、県や市の学習支援員だけでなく、ボランティアの方へ協力を依頼することで、日本語の初期指導に対応することが可能かと考える。児童の日本語習得および円滑な学習参加のための方策を検討していいく。

3 人権教育	・自尊感情を高める取組の充実	●自分自身を見つめる取組 ＊「生活つづり方」の取組 ＊（児童アンケート） 「自分にはよいところがあると思う」 …70%以上 ●相手を受けとめ、聴き合う関係の構築 ＊学力保障・生徒指導との連携 	○一昨年度、昨年度から取り組んでいる「つづり方」を、本年度も引き続き全校で毎週木曜日に行った。つづり方を書くことによって自分自身を見つめる力を養い、自分のよさを発見していくことにつながるように取り組んだ。特に、児童が書いた内容に対して必ず担任が共感したことや解決に向けての提案などを書いて返すように取り組んだ。また、児童が書いた内容に価値があることも伝えていった。 ○学校が一体となって自尊感情を高めるために、校内で連携して取り組む体制づくりを進めた。具体的には、人権委員会が学力保障（研修委員会）と生徒指導（生指委員会）と連携をとり、生活や学習の中など学校生活すべてにおいて相手を受け止めて聴き合う関係をつくる指導を進めた。聴き合う関係ができれば、相手に受け止めてもらえた実感を持つことができ、自尊感情を高めることにつながるからである。 △児童アンケート「自分にはよいところがあると思う」について，「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた児童は1学期73%，2学期75%であった。経年変化としては、少しずつ高まってきているものの、今後も引き続き取り組みが必要である。「あまり思わない」「思わない」と答えた児童には、具体的な姿や場面、そしてつづり方を通して、その子が実感を持てるように伝え続ける必要がある。そのために，教師がその子の生活背景を含めて見つめ続けることで、その子ならではのよさを見つけていくことが重要である。	・自尊感情は、自分を大切にする心を育てることにつながり、昨年に比べて大きくポイントが上がっており、評価します。 ・すべての子どもが、大切で素敵な存在であることを伝える取組は地道ですが、是非続けていただきたい取組です。 ・「生活つづり方」について一例を紹介してほしい。 ・自分自身を見つめる「つづり方」の取組は良いと思う。これと並行して、相手を受け止め聴き合う関係の構築ができれば理想的。まずは、教師が手本となって、子どもひとりひとりの話を聞く時間を確保できるようにしてあげてほしい。 ・文字を書く機会が少なくなりつつある今、「つづり方」を書くのは自分を見つめる力も養えるし、文章の組み立て方、漢字の勉強にもなり、今後とも是非継続してほしいです。 ・「生活つづり方」の取組は、個人の文章の表現能力向上にもつながり、言葉の種類、意味を知ることで自発的な説明能力ができ、自信につながると思います。みんなが楽しめる時間になることを望みます。 ・七割の児童が、自分のことを肯定的に見ることができる。この数が少しでも増えていくよう引き続き関わっていただきたい。また、家庭においての親子関係が基盤となると思うので、家庭との連携も必要だと思う。	・引き続き、自尊感情を高める取組として、「つづり方」に力を入れて進めていきたい。特に、教職員の入れ替わりがあったとしても、常に年度当初に「つづり方」の意義や目的、取り組み方などについて共通理解をはかり、全教職員が同じ思いを持って子どもにかかわっていけるような意識を大切にしていく。 ・「自分には、よいところがある」と感じることができていない子どもがいることにも、しっかりと目を向ける。その背景には何があるのか、本人の生い立ちや生活背景、学校での様子や友達関係、思いや願いなどを受け止められるよう、子どもを見続けることを意識していく。
	・周りの人を大切にする仲間づくりの充実	●いじめや差別を許さない取組 ＊いじめをゆるさない「ピンクシャツ運動」 ●共感と多様性の視点を育む取組 ＊「語る会」の取組 ＊（児童アンケート） 「先生は自分の話をよく聴いてくれたり、自分のことを認めてくれたりする」 …90%以上 	○新型コロナウイルス感染症の蔓延による9月オンライン授業の期間があけて、偏見やいじめ・差別をしない・ゆるさない取組を行ってきた。具体的には、もし病気になったうわさを聞いたとき、どのように行動したらよいかなど、自分自身に引きよせて具体的な行動につながる指導を全学年学級で行った。 ○11月の1か月間を通して、いじめをゆるさない「ピンクシャツ運動」に取り組んだ。教師、各学年、各委員会など、各立場がそれぞれ主体者となって各自の取組を行った。具体的には、教師が積極的にピンク色の服装を着用した。各学年では、自分のいじめに対する思いを書き込んで掲示したり、ピンク色のたすきをかけてアピールに回ったりした。このことにより、一部の取組ではなく学校全体でだれもが取り組んでいる一体感を持つことができた。 ○「つづり方」を発展させる形で、全校で毎週月曜日に各学級で数名の「つづり方」を紹介する「語る会」に取り組んだ。誰のどんな内容を紹介するかについては担任が判断し、紹介する際には本人に了承を得て行った。友達の「つづり方」を聴くことによって、同じ思いや経験を持つ児童にとっては共感につながり、また異なる思いや経験を持つ児童にとっては、人それぞれによって多様な思いや経験があることを知る機会となった。少しずつではあるが、仲間づくりにつながるような不安や悩みを出し、受け止める機会が出てきている。今後も、「語る会」においてまずは教師が聴いて受け止めるモデルとなり、互いを大切にする仲間づくりにつなげていくことが重要である。	・児童アンケートでも、子どもたちから高い意識数値が上がっており、学校の取り組みがよかったと思います。 ・コロナ禍では難しいテーマにもかかわらず、「語る会」の取組は評価できると思います。 ・「いじめ行為」は、個人個人、言葉の受け取り方が違っている。その日の体調や気分によっても感じ方が違う。いじめ行為をしてしまった人も、悩んでいることがあるかもしれない。難しいことではあると思いますが、つづり方から自らを振り返る機会となってほしい。 ・九割の児童が先生に認められていると感じており、感謝します。	・まずは教師が子どもたちを認めて受け止めるモデルとなることを大切にしていく。そのことが、ひいては周りの子どもたちのロールモデルとなり、お互いに受け止め合える関係につながると考えて取り組んでいく。 ・「つづり方」とともに、「語る会」についても、相手を受け止める場として、引き続き大切にしながら取り組んでいく。その際に、自分にも同じような経験があると相手に共感を感じながら聴くこと、そして同時に、一人ひとりで思いや考え方はちがうという多様性の視点を持つことにつながるよう、教職員が意識して取り組んでいく。
4 生徒指導	・よりよい生活態度，生活習慣の確立	●組織的な生徒指導を推進するための生徒指導だよりの発行 ＊月1回以上発行	○職員向けの通信として、生活指導だよりを発行した。生活指導事案の全体周知や情報共有全校で共通して指導すべき内容を掲載した。たよりの発行により、職員への共通理解を図り、学校全体で統一した指導内容を確認することができた。 ○児童に対しては、生活面での3つの柱として「あいさつ」「チャイム席」「きれいな学校」を意識して生活するよう指導を行った。ノーチャイムデーの取り組みでは、全校児童が時間を守る意識をし、声をかけ合い行動する姿が多くみられた。今後も定期的に、3つの柱に関連した強化週間を設けていくことが必要であると感じる。 ○二学期児童アンケートでは、「当番や係の仕事、児童会や委員会の仕事に進んで取り組んでいる。」の質問に対して、95%の児童が「している」「どちらかといえばしている」と回答した。定期的に振り返りをさせること、担当教師の明確な指示指導と適切な評価が重要である。 △「ふだん何時ごろに寝ますか。」の質問では、10時以降に寝ている児童の割合が33%となっている。学校での指導だけでなく、家庭への啓発と協力の必要性を感じる。 ＊実績値：1学期　14回　　2学期　6回	・学校だけでなく、家庭での協力が欠かせません。引き続き、学校における指導を続けていただきたいと思います。 ・学校全体で統一した指導内容を確認することは、重要であると思いますので、継続していってほしい。 ・生活リズムの崩れやすい状況の中、子ども自身が自らリズムを整えることのできる力を身に着けてほしいとの学校側の願いが感じられる。 ・ふだん22時以降に寝ている児童が33%もいることに驚きました。これは、家庭内の意識を変えないと変わらないと思います。 ・生活態度については、しっかり教育してもらっていると感じる。生活習慣は家庭が大きな割合を占めると考えられるので、家庭への啓発（生活習慣の乱れが引き起こす弊害など具体的に）を引き続き行っていただきたい。	・今後も教員間での情報の共有を継続して行っていく。また、本年度は生活指導に関して家庭への発信があまりできていなかった部分もあるため、家庭への啓発のしかたについても検討をしていく。
	・あいさつ運動の工夫・充実	●自然なあいさつをする習慣の育成 ＊（児童アンケート） 「誰にでも進んで挨拶をしている」…80%以上	○毎週月曜日に生活委員会を中心としたあいさつ運動を行った。あいさつ運動後は各クラスのあいさつの様子や取り組みの反省について話し合い、委員長が放送にて全校に呼び掛けをした。「あいさつを返してくれない」と感じる児童の意見から、「eyeさつ返し運動」を企画し、あいさつのポイントを児童が考え、あいさつ強化運動を行うなど、あいさつに関して主体的に考える姿が見られた。また、児童会を中心に「あいさつの花火を打ち上げよう」という行事を行い、あいさつができたら画用紙を貼り、頑張りが視覚的にとらえられる工夫をした。努力が視覚的にとらえられるので、全校児童が意欲的にあいさつをする様子が見られた。一方で、行事などが終わると意識が低下する児童が多いことが課題である。 △教室でのあいさつは意識できる児童が増えたが、廊下や登下校中に自分からあいさつができる児童が多いとはいえない。教師が継続してあいさつの大切さを伝え、通学路などでも地域の方へのあいさつができるよう指導を続ける必要がある。 ＊「誰にでもすすんであいさつをしている。」 1学期　88%　　2学期　85%	・進んで挨拶をする児童が八割を超えており、素晴らしいことと評価します。また、地域住民も挨拶されることで学校や児童に対し、一層関心を持つ相乗効果が生まれると思っています。 ・子ども達に挨拶を強要するのではなく、自然にかわせるようになってほしいと思います。 ・子どもたちはマスクをつけて登下校しているが、見守り活動時に注意して見ていると、視線を合わせて挨拶してくれる子が多いと気づき、心が温かくなりました。 ・誰にでも進んで挨拶しているが80%以上とありますが、実体験としてはそれほど多くの児童が挨拶しているとは感じられません。 ・地域の方の声掛け（挨拶）をお願いしたいと思います。 ・通学路などで挨拶がかえってこない児童も少数だがみられる。学校での取組が習慣として定着していってくれることを期待する。	・進んで挨拶をしていると感じている児童が多いため、その気持ちを大切にしつつ、教室外でのあいさつを増やせるよう取り組みを進める。自分からの挨拶ができているとは言えないため、このままで良いか子どもに考えさせる。 ・挨拶をしても返ってこない児童が数名いるため、挨拶の意味について継続的に指導をし、自然な挨拶ができる児童を増やしていく。 ・児童が主体となって取り組める行事だけでなく、教師による挨拶運動も定期的に行う。

5　地域とともにある学校づくり	・命を守る取組の充実	●感染予防についての取組と，人権尊重の地域への啓発 ・コロナ感染予防対策 ・学校だよりの発行 ＊学校だより…月1回以上 【委員アンケート】	○県及び市教育委員会の通知や通達に従い、また、学校医からの意見も取り入れ、教育活動全般において感染予防のための具体的な取り組みを行ってきた。 また、地域の方から5・6年生へフェイスシールドを寄贈いただいた。 ・手洗い、手指消毒、マスク着用の徹底 ・換気 ・グループ活動や給食配膳時のフェイスシールドの使用、及び黙食の指導 ・学校業務支援員による消毒作業 ○学校だよりやホームページ、メール配信を通して、地域に啓発を行った。 ○1月末現在、学校だよりは22号を発行している。	・桜島小学校での取組は、努力が感じられる。学校だより、ホームページなども適宜発行、更新され、有効な手段となっている。 ・コロナ感染予防については多忙な中、対策をしっかりしていただいている。	・引き続き、日々の児童の健康観察を丁寧に行い、校内の感染予防に取り組む。 ・児童が罹患した場合、偏見や差別につながる行為、誹謗中傷など人権侵害に及ぶことがないように指導し、人権の尊重を大切にした取り組みを行う。
	・地域ボランティアの協力体制の推進	●地域人材，地域資源の活用 ・読み聞かせボランティア ・学習支援ボランティア ・桜の整備等 ＊感染状況等を踏まえ，必要に応じて検討したうえで可能な限り	○オンライン期間中、及びコロナ感染が拡大した時期を除き、感染予防を徹底しながら、家庭科を中心とした学習活動や読み聞かせ等でボランティアに入っていただくことができた。また、今年度は学校運営協議会の働きかけで、土曜授業や夏季休業中等に、地域のボランティアの方に校内の除草作業をしていただいた。地域の方には、コロナ禍においても積極的に児童の登下校の見守り、声かけをいただくなど、温かい支援を受けた。 ○9月に、樹木医による桜の診断を受け、学校運営協議会の協力を得ながら年案を通して保全活動を行った。 △桜の維持管理について、卒業生から在校生への引継ぎを継続していく。	・草刈りや交通安全巡視など、積極的に参加したいと思っていますが、このような意識を地域住民が多く持っていただけるように、地域からも働きかけていきたいと思います。 ・地域ボランティアの活動状況をもっと発信してほしい。 ・コロナの影響で、ボランティア活動が困難になってきていますが、できる限りの協力は得られるよう学校からの状況報告をいただき、活動が途切れて消滅しないよう配慮してもらえていると思います。 ・各種ボランティアのおかげで、児童の学習や安全など守られており、ありがたく感じる。	・地域のボランティアさんの紹介や、活動報告など、学校だよりやホームページ、校内掲示等を通して、積極的に発信していく。